

## ニュースあれこれ

### 日本文化と飾り 清水一郎(幹事:73年入社)

“正月飾り”“松飾り”“注連飾り”“節句飾り”“壁飾り”“着飾り”“髪飾り”“首飾り”“耳飾り”“床飾り”“船飾り”・・・等々、“飾り”に関するワードは枚挙にいとまがありません。美術史家の辻惟雄先生は「飾る行為は、それが人間の本性に根ざしたものであり、文化を形づくるうえでの根源的な要素である」と語っています。日本人にとっても“飾る”という行為は古代から受け継がれてきた美意識であると言えます。皆さんのお宅でも花や絵画、書、工芸品、盆栽などを飾っておられるのではないのでしょうか。想像するに古代の人たちも野の花を身に着けて楽しんでいたのではないかと思います。確かに飾る行為は日本人の美意識に通じるものがあるように感じます。

まずは縄文時代の飾りから。ご存じ火焰土器です。もちろん呪術的な側面はありますが何といてもこの装飾美、実用を超えた驚きの造形美です。画家の岡本太郎の作品のモチーフになっていたようです。



6世紀、大陸から仏教が伝来します。八百万神の国は大慌てとなりますが、その時目にした仏教寺院の華麗な内陣に人々は驚いたのではないのでしょうか。まさに“荘厳の美”と言える装飾の美しさは一瞬にして人々を仏の世界に引き込む圧倒的な力がありました。

(写真は長野善光寺)



平安時代は貴族の文化が栄えた時代、よくドラマ出てくるような十二単や調度品、寝殿造の邸宅や神社仏閣に「これでもか」というほど金銀を惜しみなく使って権力を誇示していました。とくに平安時代は日本史上最も女性の感性が大切にされた時代ともいわれ、女性たちの趣味や嗜好が色濃く反映された時代でもあります。かな文字の出現もあり、紫式部や清少納言など女性文学がその良い例ではないのでしょうか。



9世紀後半に遣唐使が廃止されたことで鎖国状態とな、そのことで“国風文化”と呼ばれる日本独自の文化が醸成され、建築、服装、調度、絵画等のその後大きな影響を及ぼします。この時代を形容する言葉に“風流”があり、また“雅(みやび)”の時代でもありました。



## ニュースあれこれ

時代は下り、鎌倉時代からはいよいよ武士の時代となります。武具や兜、陣羽織などはやり過ぎではないかと思えるほどの装飾を施し、自身の存在をアピールします。何はともあれ目立ってなんぼの世界です。武士の時代は明治維新まで約700年間続くこととなります。



その後、室町時代から安土・桃山時代にかけては内乱の時代、“応仁の乱”などというややこしい争いが11年も続き京都が焼け野原となります。この時代を席卷したのが信長と秀吉というやたら派手好きの武将でした。安土城や秀吉の“金の茶室”など贅を極めた装飾であらゆるものを飾りたてます。



黄金の茶室 (MDA美術館)



室町時代の建築様式に大きな変化がありました。“書院造”の誕生です。それまでの“寝殿造”にはなかった畳敷きで、床の間が設けられ“飾る場”が誕生したことで室内での“飾る美”に変化が起こります。

江戸時代の約260年は鎖国状態で、この間に現在に通じる美術、工芸、建築など高度な術や衣食住に関わる基礎が出来上がったとえます。この時代は庶民文化が隆盛を極め時代で、例えば歌舞伎。その衣装は絢爛豪華、舞台装飾や小道具などにも高い装飾性粗間見ることができます。

絵画の世界では浮世絵。多色刷りの錦絵はめ鮮やかさと同時に、大胆な構図や遠近法が海外の芸術家にも大きな影響を与えましたゴッホの模写などが有名です。

工芸の世界では、例えば漆芸のことを英語で“Japan”と言いますが、その高度な技術と繊細で煌びやかな装飾性は世界的にも高い評価を受けています。陶磁器もヨーロッパの貴族の垂涎の的となり、有田や伊万里は世界有数の一大生産地になっています。



六世尾上菊五郎所用「揚巻」の衣装  
(白越所蔵)

## ニュースあれこれ

### 江戸時代の飾り



櫛



髪飾り



蒔絵



磁器 柿右衛門



広重「江戸梅屋敷」(左)とゴッホの模写

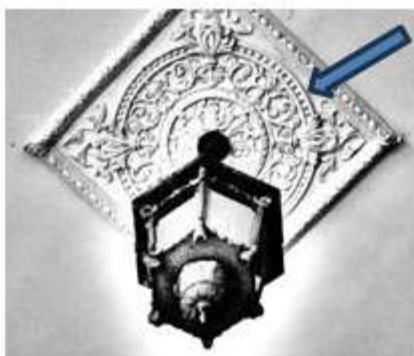


尾形光琳「紅白梅図屏風」(MOA美術館)



江戸時代に醸成された高度な技術が明治維新後のさまざまな文化に大きな影響を与えます。ひとつの例が建築です。明治政府による公共の建物はすべて洋風にせよとの号令一下、横並びで“擬洋風建築”が各地に誕生します。建築家もいない、図面もない中で力を発揮したのが地方の大工や左官職人たちでした。東京に出てさまざまな洋館をスケッチし大工と左官の技術と勘で見事な擬洋風建築を建てたのです。基本の形は、左右対称、バルコニー付きの車寄せがあり、必ず塔屋を持つというものでした。

ただ、さまざまな建築を見聞したためか様式がバラバラで奇妙な建物もありますが。



天井からシャンデリアを吊り下げる元の部分の装飾“中心飾り”と呼びます。欧米では“型”を使って大量に作り出すため、どの部屋も同じ中心飾りが設置されています。日本では左官がコテひとつで作り上げるためさまざまな中心飾りを見ることができます。外国の建築家がこれを見て驚愕したという記録も残っています。

洋館を訪ねる機会がありましたらちょっと天井に注目してみてください。

## ニュースあれこれ

### ウィンドー装飾

百貨店の運営上、非常に大事な要素のひとつに“装飾”があり、三越でも装飾を担当する部署が存在します。館内の装飾、サイン・POP関連、そしてウィンドー等多岐にわたり店の顔としての役割も担っています。三越の装飾チームは長年、季節、催事ごとにウィンドーの入れ替えを行い、その結果、あまり知られていませんが数多くのディスプレイに関する賞を獲得しています。

長年この仕事に携わってこられた遠藤信之さん(68年入社)が昨年お亡くなりになりました。亡くなる直前にこのことを後世に伝えてほしいというお手紙と共に多くの資料を旧友会事務所にお送りいただきました。ほんの一部ですが超一級のディスプレイ担当チームが手がけた力作を紹介します。



**年鑑日本の空間デザイン賞とは:** 1973年から実施される、優れた空間デザインを日本全国から公募する、空間デザインの分野では国内最大のアワードです。さまざまな分野から厳正に選ばれた作品は、『年鑑日本の空間デザイン』に掲載されます。三越は遠藤信之さんが推進するブランドイメージ向上のため、1985年～2018年まで毎年応募し、多数の入賞を果たします。三越の貴重な実績を記す資料なのです。

### ■ディスプレイデザイン奨励賞

テーマ:クリスマスin三越(1985年)  
日本橋三越本店ショーウィンドー



プロデューサー: 遠藤信之  
デザイナー: 末永積治・山崎道夫

### ■ディスプレイデザイン優秀賞

テーマ: コスタ・デル・ソル(1992年)  
日本橋三越本店ショーウィンドー



プロデューサー: 遠藤信之  
ディレクター: 嶋澤稔  
コーディネーター: 仁平京子